

『懷溜諸屑』収集者の入船扇蔵について

Iritsume Senzo, the Collector Behind Futokoroni-Tamaru-Morokuzu
NAKAGAWA Katsumi

中川 桂

はじめに

国立歴史民俗博物館に所蔵される『懷溜諸屑』（以下、『諸屑』と略記）は、噺家の入船扇蔵が収集した資料を柳家周岱が整理したものと伝わるが、収集者の扇蔵について詳しいことは判明していない。しかし、噺家の収集した資料群ということで、その中には噺家の見立番付やピラなど、噺家や寄席の興行にかかわる一枚摺が多数見られる。なかでも目立つものとして、色摺の桂文治の興行ピラがある（図1）。後述するが、桂文治は江戸・上方双方の落語界とかわる、噺家の中でも大きな名跡のひとつである。そして文治の興行ピラが含まれているということは、この文治の活動期にこれらの資料が収集された可能性が高い。そこで今回は考察が可能な噺家の代表格として、該当期の桂文治を取り上げつつ、その代数を確定するところから収集者の入船扇蔵の特定についても考えてみたい。



図1 桂文治興行ピラ

一 桂文治の名跡

桂文治は上方で始まった名跡で、初代は寛政六年（一七九四）頃に大坂の坐摩社で落語の定席を開いた人物である。また、落語の歴史はもちろんそれ以前から存在するが、現在の落語家の系譜に直接つながる始祖であり、「桂」を名乗る落語家の開祖である。同じく大坂で活動した二代目は初代の実子であり、若くして没した。その後、三代・四代は双方の落語界に存在したが、三代目は江戸のほうに存在したと思われる。上方で三代目の文治襲名がなされたのは文政十年（一八二七）より後かと思われ、これは江戸で文治が名乗られたよりも事後になる。

五代目からは、桂文治は原則として江戸落語の名跡となり、現在も東京の落語界で十一代目の文治が活躍している。

それら代々の概要を確認する資料としては『本朝話者系図』を用いる。⁽¹⁾江戸の三代目文治については、『本朝話者系図』を抜粋して示すと以下の通りである。

古 桂大和大掾 初メ二代可楽門勇馬。本芝一丁目ノ産なり 上京して江戸はなし扇松の門ニ入扇勇。同人妻ハ文治の娘也。扇松没して入夫となる。文政十亥年三世可楽せい馬と云。初而上京。扇勇を取持て三代桂文治となす。

これによると師匠である扇松の妻が、上方の三代目文治の娘であった。扇松が没したのちに入夫となった縁で、江戸において三代目文治を名乗ったという経緯である。

芸名については、（初代翁家さん馬門下の）さん遊↓房馬↓上方で（扇松門下の）扇勇を経て、文政十年頃から江戸において三代目文治を名乗ったと考えられる。その後は天保末頃、初代才賀に文治を譲り、文楽↓楽

翁↓大和太掾と改名した。従って文治の名乗りは文政十年頃から天保末頃の間である。最後は大和太掾を名乗った。

江戸で四代目を名乗った噺家は、才治郎の門人として前名・才賀を名乗り、その後四代目文治となり、大和、もしくは大和太掾の名で没した。文治を名乗ったのは天保十二年（一八四二）から万延元年（一八六〇）あたりと推定される。

『本朝話者系図』の記述は、以下の通り簡略である。

養子 古 桂大和 初メ竜齋新語ノ門人才賀四ツ谷ノサン都川歌丸ノ弟也 四代文治。
大和と云テ没ス

その注釈では『文之助系図』⁽²⁾により、「四代目桂文治 后二代目大和太掾又桂寿ト云 慶応二卯年六月廿六日 四十九才卒ス（後略）」とあり、没年が記されている。生年は逆算により文政二年となる。ここでは慶応二年（一八六六）の没とするが、これについては慶応三年とするものもある（『古今東西 落語家事典』）。天保十二年に三代目文治の養子となり四代目を襲名した。万延二年正月、二代目文楽に名跡を譲って二代目大和太掾となる。従って名乗りの期間は（一説に）天保十二年から万延元年の間である。ちなみに長男の由之助がのちに六代目文治を継いでいる。

『諸層』所収の、見立番付を中心とする寄席関係資料は多くがこの期間すなわち四代目文治の活動時期にあたり、従って『諸層』に所収される数点の番付や寄席ピラに見られる文治は、ほぼこの四代目と考えられる。⁽³⁾

以下の代々を簡略に記せば、五代目は万延二年正月に前名の二代目文楽から五代目として文治の名を継いだ。早々に死去している。没年は

万延元年とするものもあるが、いずれにせよ文治を名乗ったのはごく短期間であり、『諸屑』よりは少しの時代のあたる。六代目は音曲・芝居噺を得意とした噺家で、慶応二年に六代目文治を襲名した。明治期の資料に見える文治はこの六代目である。再度述べれば、ここに示した五代目・六代目は時期的に適合せず、四代目の文治が『諸屑』の時期に該当することになる。

『諸屑』に収められる番付の多くには、落語界で重要な存在である桂文治の名が見える。年次の確定されるいくつかのものを取り上げてその位置付けを確認しておきたい。

なお、年記のない番付の年次は、『諸屑』所収のものと同じものが『日本庶民文化史料集成』第八巻「寄席・見世物」中の「番附」に多く収載されていることから、同書の解題（延広真治氏による）を参照した。

弘化三年（一八四六）の番付『昔噺連名』では、文治は西小結に位置している。嘉永五年（一八五二）の番付『昔噺』では東小結の位置である。安政二年（一八五五）の一枚摺『昔噺』（図2）には大関や前頭等の位付けはないが、文治は二段目の中央寄りに位置しており「四代目桂文治」と記されており、代数も確認できる。そのほか、逐一挙げることはしないが、いずれの見立番付においても文治の名は東または西の上位に見出すことができる。

これらから、四代目の文治は見立番付において大関と位置付けられるような、落語界の筆頭に君臨するほどの存在ではないものの、必ずといってよいほど上位に配置される、当時を代表する噺家の一人であるといえる。そしてこれら『諸屑』に収集された番付類からは、それが弘化から安政年間のものが中心であり、この期間は四代目文治の活動期に合致することから、先述した「図1」の、色摺で年記のない興行ビラについても四代目文治のものである可能性が高いと判断した。

いずれにせよ文治は大きな名跡なので、見立番付には必ずその名が掲

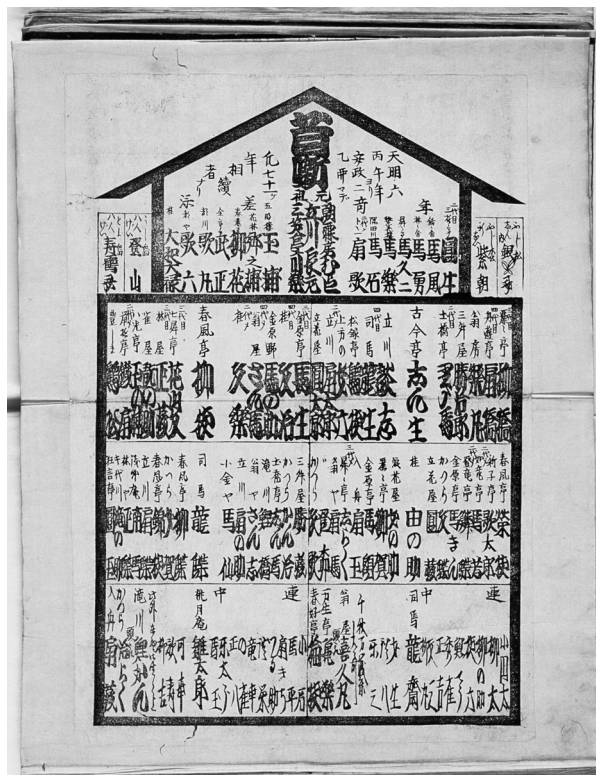


図2 『昔噺』

載されている。そのほかに小噺が載る摺物などもあり、文治の存在の大きさ、すなわち「大看板」であることが確かめられる。

二 入船扇蔵の代々

次に、『諸屑』の収集者である入船扇蔵につき、その代々を確認したい。ただし、桂文治のような大きな名跡とはそもそも前提が異なる。大事に扱われた名跡ではないだけに、代々の系譜には位置付けられないまま扇蔵を名乗った者もあり、厳密な代数の確定は難しい。

『本朝話者系図』では三代（三人）の扇蔵が確認できる。初代の扇蔵にあたるのは次の嘶家である。

古 二代 扇橋 鈴木十蔵。滑稽咄ニ長す。初メ新橋又。入舟扇蔵。なぞく合。短冊にとき記す。狂言作者。並木五瓶 仙台ニ而七十五才ニ而歿ス

同書の注釈ともあわせて判断すると、当初は新橋を名乗り、扇蔵を経て、最後は二代目扇橋となっている。ただし扇蔵を名乗った時期は特定できない。「天保十二年以降は高座を退いたと思われる」ともあり、『諸層』の資料の時期とは合致しにくい。続いて二代目を確認したい。

二代門 古 三代 扇橋 愛右下の産。山高鉄三郎。初メ扇童。又扇の助。又二代扇蔵と云。野州宇都宮ニ歿ス。扇橋三代目迄人物絶品也

こちらは扇童から扇の助（扇之助）を経て二代目扇蔵となり、その後は三代目扇橋となる。同書注には

天保十年『嘶連中帳』に見える「入船扇蔵」、同十三年『百面相仕方ばなし』に見える「扇橋」以降嘉永五年『昔嘶』の「当時旅行部」に見える「三代目扇橋」まで同一人と考えられる。（中略）『落語家事典』に、天保十二年には師名を譲られ三代目となったものと思われる。弘化、嘉永頃の番付に三代目として見える、とある。弘化三年『昔嘶連名』世話役欄に「船遊亭扇橋」、弘化四年～嘉永三年頃『昔

嘶連中枝葉鏡』三段目に「扇蔵改二代目扇橋門人扇蔵 三代目船遊亭扇橋」とあり。生没、墓所等は未詳。

と見える。『百面相仕方ばなし』から、少なくとも天保十三年には前名の扇蔵から三代目扇橋を襲名していると思われる、弘化から嘉永年間には扇橋で活動している。扇蔵の名で活動していた時期は、『諸層』の資料が見られる時期よりはやや早いようである。

次に三代目の扇蔵を確認したい。『本朝話者系図』の記述は「三代扇橋門人」古 扇蔵 下谷ノサン」と、甚だ簡略なものでしかない。同書の注釈には以下のようにある。

『奇奴部類』に「下谷 三代目 入船扇蔵 始メ三代目船遊亭扇橋門人晴風舎扇子ト云」とあり。師である三代目扇橋の前名として二代目扇蔵が見え、この扇蔵は『奇奴部類』にあるように三代目ということになるが、扇蔵の代々は混乱が見られ、代数は必ずしも確定的ではない。

ここでは代数について断定が避けられているが、「扇蔵の代々は混乱が見られ」とあるように、代数確定が困難な面があるためである。⁽⁶⁾しかし三代目扇橋の門人であることと下谷の出であることが両文献で一致する点から、扇子を前名とする入船扇蔵を、ひとまず三代目の入船扇蔵としてよいだろう。後述する番付や摺物でも、前名の扇子から扇蔵に改名したことを示すものが三点あり、うち一点に「扇子改 三代目扇蔵」との表記が見られるので、扇子から改名した扇蔵が三代目であるとする資料は、計二点存在することになる。

また、明治四年前後の成立である『本朝話者系図』に「古 扇蔵」（筆者注：「古」は「故」の意）とあり、その頃にはすでに没していること

が知られる。いっぽう、『諸屑』のコレクションは安政頃までのものが多しことを勘案すれば、この死没時期も辻褃が合う。

よって、『諸屑』のコレクションをした扇蔵は、前名「扇子」から三代目の「扇蔵」になったこの人物と確定したい。

三 入船扇蔵の位置付け

ここで『諸屑』所収の番付類から、この扇蔵の芸名の変化や位置付け、および芸風に関する記述を見ておきたい。まず、扇子の名で掲載されているものが三点存在する。弘化四年から嘉永二年の間の刊行と考えられる番付『大寄鑑』では、「入船扇子」として西四段目（最下段）の前の位置に見られる。次に、弘化三年の年記を含む番付『昔嘶連名』では、西側の三段目、前頭の後半にかかる位置に扇子の名が見える。また、年次不明の番付『大世勢』ではやはり「入舟扇子」として西前頭三段目に見られる。

改名に触れたものは三点存在する。弘化四年から嘉永三年の間の刊行と考えられる摺物『当時昔嘶連中枝葉鏡』（図3）では、三段目右方に掲載されていて「扇子改 三代目扇蔵」とあり、嘉永五年の番付『昔嘶』では、西二段目、前頭の位置に「扇子改 入船扇蔵」が見られる。また、嘉永七（安政元）年の摺物『寅春新梓 落語年代記』には「扇蔵 入舟ト云。始メ扇子ト云」と記される。

これらからうかがうところでは、おそらく嘉永三年ごろまでには扇子から扇蔵に改名したものと想われ、嘉永七年に至っては扇蔵として認識されているといつてよい。嘉永四年の『昔はなし』では西前頭二段目に「入船扇蔵」が見えるが、同番付に「扇子」は見られない。さらに年次が明確なものとして後年の一例を挙げれば、安政二年の『昔嘶』では、掲載されている位置は最下段左端であるものの、西側の「頭取」二名のうちの一名として「入舟扇蔵」の名が見えるので、安政初頭には扇蔵の

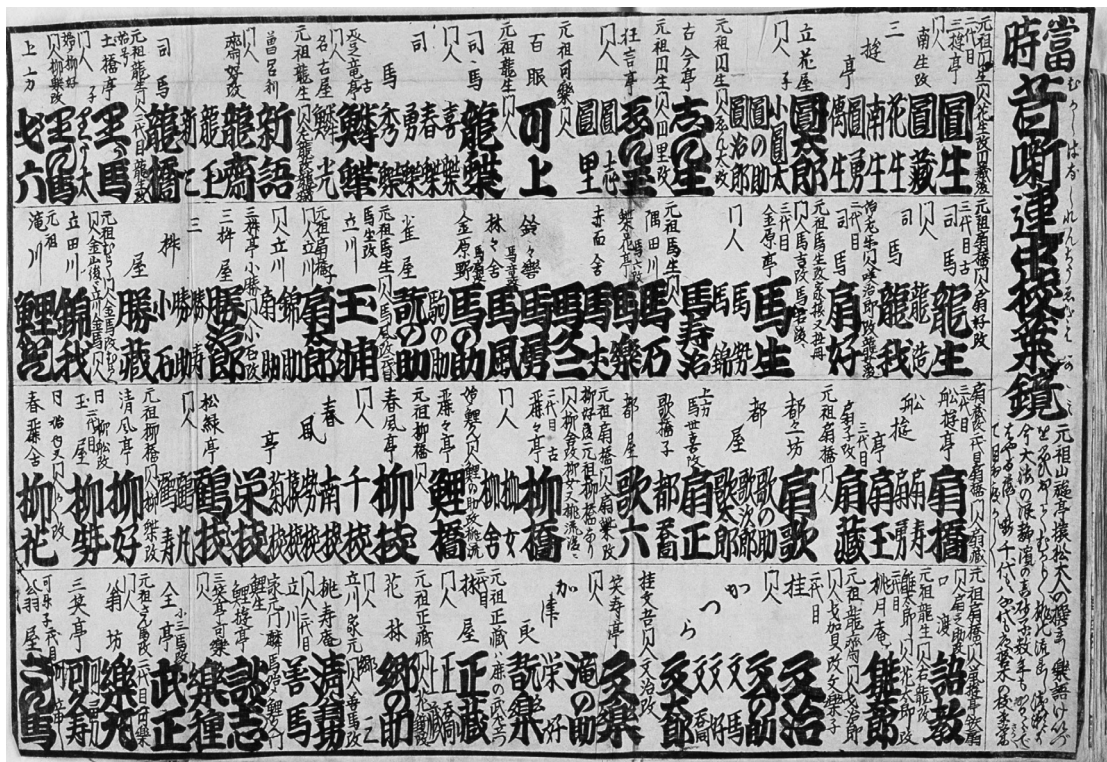


図3 『当時昔嘶連中枝葉鏡』

名が定着し、かつ一定の存在感を有していたものと思われる。

次に扇蔵の芸風をうかがうことのできる資料を見ておく。年次は不明であるが、三幅対(三人一組)の形式で芸人の名を記した摺物『為御覧』では、上から四段目と下方ながらも「うきよはなし」(浮世噺)の欄に「勝蔵、栄枝、扇蔵」と三名中の一人として名が見える。この摺物では、芸内容の区分として「浮世噺」は多く見られることから、これが一般的な落語を指していると考えられる。扇蔵の得意とする芸も、怪談噺や人情噺等ではなく、滑稽味の多い落語であったことがうかがえる。また、林屋正蔵が所持していた西両国林屋席の興行ビラ(図4)で、年次は不明であるが「當ル正月元日ひる時ヨリ」との記載のあるものに扇蔵の名があり、林屋席への出演機会があったことが確かめられるが、そこには「滑稽はなし 扇蔵」と記されている。これはやはり笑いを主とする、こんにちの落語を指すものであろう。笑いを主眼とする滑稽味の多いネタが扇蔵の得意芸であったといえる。

『落語根無種／評判譬喩診 鼻競鞍馬大會』は、嘉永六年から安政三年の間に刊行されたと見られる一枚摺で、計五十名の落語家の寸評が掲載されている。その中には「入ふね扇蔵」も含まれており、「人をいのらバ穴ふたつ 芸道はいふ事ハなけれども小がたなきいくやごまをする事は御出世のさまただでムリ升」との評が記されている。意味するところが今一つ判然としないが、せっかく芸の実力はあるのだが、人におもねり、取り入ろうとすることに神経を向けているようでは落語家として大成しない、といったことを書いているものと思われる。話芸の力量はあったものの、何か身の処し方が原因で信頼を得られず、重用されない落語家であったのかもしれない。

最後に、一風変わった落語家の一枚摺が『諸層』中に見られるので紹介しておく。それは年次不明の、『江戸じまん はなし家名勝図会』と題されたもの(図5)で、噺家連中の得意芸や芸名のイメージを用いて、



図4 林家席興行ビラ



図5 『江戸じまん はなし家名勝図会』

それぞれの噺家を山野や建物などの名所に見立てて一枚の風景図に入れ込んだものである。ここで扇蔵は、画面左上方の、構図上ではもっとも奥の方に置かれている。「入船」の屋号のイメージから港の風景に擬され、「扇蔵 入舟見ゆるにぎやか也」との文が付されている。扱われ方は小さく、見立番付に例えれば最下段といったところであるが、そのような位置であっても噺家連中の下位には含まれる扇蔵の存在がうかがえる。総じて見立番付では、扇蔵は多くが前頭の位置、それも上位ではなく二段目以降の下段でよく見受けられる。ここから、扇蔵は噺家としてさほど大きな存在ではなかったことが知られる。だがまた見方を変えれば、『江戸じまん はなし家名勝図会』にも登場していたように、番付に掲載されない無名レベルの噺家でもない。したがって扇蔵は大物の噺家とはいえないものの、斯界に一定の存在感を有する人物であったと考えられる。

まとめ

まず、『諸屑』には噺家にかかわる多数の見立番付が収集されており、そのうちの多くに名が見える四代目桂文治を検討することで、収集された時期をある程度限定することができる。その上で入船扇蔵を見ると、その活動時期と資料の収集時期から、いわゆる三代目の扇蔵が資料を収集した人物であるとなすことができる。

今回は大物噺家の代表格として、『諸屑』中に色摺の興行ピラが残されていることなどから桂文治を取り上げたが、もちろん他の噺家についても、吟味すれば種々興味深い点が出てくるはずである。ただ、その際も、どんな番付にも顔を出している文治を確認することが、基本線の確認の役割を果たし得ると考えている。

入船扇蔵は些末な名跡であるだけに、その芸名を名乗ったものの、代数に数えられずに忘れられた者もいると考えられるが、『本朝話者系図』

等に基づく把握において、現時点では三代目として認識される入船扇蔵が収集者と考えられること、またこの扇蔵は主として滑稽ばなしを演じた落語家であったことをひとまず確定した、というところで今回は任を終えたい。

註

(1) 「全亭武正事 三世三笑亭可楽」が記したもので、この可楽は代数では二代目と三代目の間に位置し、正規の代数には含まれていない。成立時期も明確ではないが、明治四年正月までに成立したものと推定される。筆者を含む研究者五名による「本朝話者系図の会」により翻刻・注釈がなされ、国立劇場調査養成部編で『国立劇場演芸資料選書』11として刊行。

(2) 正式名称は『古今落語系図一覽表』で、『文之助系図』は四代目桂文之助が著したことからの通称である。山本進の校注で、国立劇場調査資料課編『演芸資料選書』8として刊行。

(3) 『諸層』所収資料のうち文治の名が見られるものの中で、天保八年の摺物『雅俗流行合』（所作話 文治）とあり）の文治のみ、時期的に三代目の文治と考えられる。

(4) 表題はないが、噺家五名の小噺を収載した摺物が『諸層』中に残る。文治のものは「上方者」と題された小噺で、内容は以下の通り。

大黒屋の子つ助といふ男、恵方参りに伊勢参宮から上方見物に來り、江戸とちがつて上方ハせまい所だといハれて上方者むつとして 上モシそないにおつしやるが、神社仏閣ハ上方じや。のこらず御見物なされたか 子ハわつちもこねづみの時分一度のほつて見やしたが、そしてけふハどこを見せなさるよ 上ハさよじや。今から四天王寺の七堂がらんを案内しませう 子ハおらア天王寺はまつひら御めんだ 上ハナゼイナ 子ハハテねこ門が有るから 桂文治

(5) 正式名称は『落語家奇奴部類』二代目船遊亭扇橋著、弘化五年序。『日本庶民文化史料集成』第八巻ほかに翻刻がある。

(6) 『文之助系図』では「三代扇蔵 初メ扇蔵改」とあり、『本朝話者系図』の「扇蔵の代々は混乱が見られ」との注釈はここから来ている。

(二松学舎大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇一九年八月五日受付、二〇二〇年一月二七日審査終了)